

剣道初心者指導における片手打ちの検討

田原 啓吾（鳴門教育大学大学院）

木原 資裕（鳴門教育大学）

I. 緒言

「剣道とは剣の理法による人間形成の道である」これは昭和 50 年に全日本剣道連盟が制定した剣道の理念である。この言葉をよりどころとして多くの剣道愛好家が剣道修行を行っている。それと同時に「剣道修錬(剣道を行っていく)の心がまえ」として、「剣道を正しく真剣に学ぶことにより、心身を練磨し、旺盛なる気力を養い、剣道の特性を通じて、礼節を尊び、信義を重んじ、誠を尽くし、常に自己の修養に努める。以って国家社会を愛して広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである。」というものがあるが、この言葉は、剣道に限らず武道全般に当てはまるものであり、武道が目指す方向性が表されている。平成 20 年 3 月に告示された新学習指導要領で、平成 24 年度より中学校の保健体育授業に「武道」が必修となることが決まった。それと同時に武道を正しく教えられるのかという疑問の声も上がり、一番の問題となっているのは指導者不足の問題である。武道を教えられる環境が整っていても、指導者が武道の経験がなければ、武道を教える事は難しい。初心者が教えられるような指導内容の精選も出来ていないのが現状である。

指導時間も同様で、従来の指導法では詰め込み要素が強い指導内容になる可能性が高く、武道で触れなければならない部分を触れずに通過してしまう場合も考えられる。特に剣道では、道具の着脱や、礼法にかなりの指導時間を要する。また、中学生が日常生活を送るなかで、何か物を使って人をたたく経験をする機会などあるはずがないため、導入部分での指導に多くの時間を要すること

が予想される。そのような中、木原ら（2010）によって初心者指導における右片手打ちの有効性が示唆された。この指導法により従来指導が難しかった手の感覚なども指導出来、初心者が剣道を学びやすい環境を作れる可能性がでてきたと思われる。

そこで、本研究では、片手打ちが競技として行われている短剣道とスポーツチャンバラに着目し、剣道の初心者指導に応用できないかを検討するとともに、剣道指導の効率化がはかれる指導方法を検討することを目的とする。

II. 研究方法

- 1) 武道の教育的価値および、必修化に向けての理解を深めるように剣道・短剣道・スポーツチャンバラについての文献・資料収集を行う。
- 2) 短剣道やスポーツチャンバラを深く知るために、稽古や試合会場に出向き参加・観察することで短剣道やスポーツチャンバラの実態を調査する。
- 3) 片手打ちの初心者指導を実際に行い、片手打ちの有効性や問題点を把握する。

III. 結果と考察

1. 短剣道とスポーツチャンバラ

短剣道、スポーツチャンバラの二つの競技は小太刀を片手で操り試合・稽古を行うため、両競技が剣道初心者指導に活かせるか検討した。

短剣道はまだ短剣術と呼ばれていた頃、短剣術については当時の火力重視の考えが浸透してくる

に伴い、機関銃などの自動火器の装備が進められる反面、銃剣術軽視の兆候が現れ始めていた。しかし、砲手及び機関銃手等が射撃不能になった場合の対応力を高めておくため、近接戦闘における格闘武術としての短剣格闘能力の向上の必要性があった。主に銃剣との白兵戦で使われていたが、現在の短剣道は短剣対短剣がメインで、現代剣道に近い形式となっている。しかし、短剣道の試合では突き技が主体であり、激しく突き合う事は初心者指導には適さないと思われる。

次にスポーツチャンバラであるが、スポーツチャンバラは小太刀護身道とよばれる護身術が、スポーツ的要素を強く含め、スポーツチャンバラとして誕生した。主な特徴としては、老若男女問わず幅広い年代が行えるような、用具の開発と、ルール of 簡単さである。こちらは名前の通り、チャンバラごっこに近く、スポーツチャンバラの試合でも、打ち合いという表現よりは、当て合いの要素が強く、上体も崩れた状態で打ちを繰り出すので剣道初心者指導には適しないと判断した。

両競技とも、小太刀の構え特有の撞木足や、入り身の体勢になっている事が多く、撞木足・入り身の両方ともが、剣道では悪癖となっているため両競技とも初心者剣道指導にそのまま取り入れる事の難しい原因の一つとなった。

2. 小太刀を用いた片手打ち指導の可能性

小太刀のメリットとして機能性操作性に優れる・先が振れる感覚が身に付く・右手の感覚がわかる・左足に体重が乗せられる・右手・左手の位置がわかるなどが挙げられる。デメリットとしては、身体が開いてしまう・足が開いてしまう・両手の感覚が身に付きにくいなどがあげられるが、機能性や操作性に優れるという点は、発達段階である中学生にとって非常にメリットであると言える。また右手・左手の位置が初心者にはなかなか

分かりにくいところであり、自分の目の届かない位置なので、意識もしにくい。その位置を短い竹刀を使って覚えさせる事が実証できれば、片手打ちの最大のメリットにもなりうる可能性が高い。さらには、片方ずつの指導になるため、教える側が初心者であっても教えやすい可能性が高い。



IV. 結語

片手打ち指導を通して、小学生からは、技術面だけでなく、通常の竹刀指導でよく聞かれた「難しい」や「分からない」といった言葉などが聞かれなくなり、自分から積極的に小太刀を振るなど意欲の面でも効果が見られた。技術面でも指導実践4回目までに踏み込み足までいけるなど、通常の竹刀指導よりも早く基本指導ができ、剣道授業における基本指導の短縮化につながられると思われる。

大学生も同様に男女問わず、技術・意欲の面で向上が見られ、初心者にもっともつきやすい悪癖である振りかぶりの問題（構える位置が低い・左右にぶれてしまう）という所においては小学生・男子大学生・女子大学生共に大きな成果が得られた。また、一番の問題であった小太刀から竹刀への移行も問題なく行う事ができたのも大きな成果の一つだと言えるだろう。

このことから、小太刀を用いた片手打ちの初心者指導の有効性が示唆された。さらに、初心者指導において、片手打ちは学習意欲を高め、基本指導時間を短縮できる学習内容に発展できる可能性があることが明らかとなった。

